

# 共同研究プロジェクト 政治学グランドセオリーの新展開

## <中間報告>

プロジェクト責任者 石積 勝

本プロジェクトは政治学の根本的見直し作業の一環として位置づけられている。その基本的なスタンスはプロジェクトリーダーである筆者の論文「近代西洋政治学の罫」（『追悼神島二郎』2001年）に述べられているが、要するに西洋近代で大きく展開した社会科学の、特に政治学の分析枠組みの限界を見据え、その再構築、さらには根源的超克を試みるというものである。もちろん、このことはある意味では気の遠くなるような無謀で大胆な試みである。なにしろ西洋政治学の、さらには近代社会科学の分析枠組みの総体そのものを問題にし、それを超克し、その時代的限界（つまり近代の成立という特殊な時代背景の中での産物という限界）、空間的限界（もっぱら西洋社会の経験と現実という背景の中での産物であるという限界）を超え、さらに普遍的な分析枠組み、社会理解のための分析枠組みを構築しようということであるからである。

幸いにして、この作業を導く手がかりとして、政治学者故神島二郎の提示した「政治元理表」（『追悼神島二郎』所収）とその部分的解説があるが、われわれはこれを深化させ、パラフレイズすることに成功していない。いまだ未完の「政治元理表」である。その深化・発展のために、一方ではさらなる思想的沈潜の下での洞察と構想がなされなければならないが、同時に近代社会科学の陥穽とその超克のヒントを得るためのフィールド・ワークもまた重要であるとわれわれは考えている。

そうした問題意識の下に、この間、国内外各地を訪れ、新たな分析枠組み構築のためのヒントを獲得せんとしてきたが、その中には本プロジェクト予算からの支出を伴わない2019年2月の筆者のキューバ・ハバナにおける第4回「International Conference for World Balance」(2019,Jan,29)における発表と様々な討論、あるいは2019年9月のポーランド・アウシュビッツでの視察と討論なども含まれる。いずれも本プロジェクトの問題意識の下でのフィールドワークである。またプロジェクト予算内でのフィールドワークとしては、プロジェクトメンバー石積及び原による鹿児島「からいも交流」への訪問がある。一泊二日で行われた鹿児島大隅半島での「からいも交流」の発案者、初代運営者の加藤氏とのフィールドめぐりながらの討論は大きな刺激をわれわれに与えた。そこでまずプロジェクトメンバー原氏とハーバードの同窓である、その加藤氏との議論などについて若干触れたい。

アメリカ・ハーバード大学で学部学生として正統的社会科学、政治学にどっぷりつかる青春を過ごした加藤氏は、ハーバードで日々眼前に繰り広げられる、その圧倒的な開明性、説得力に大きな感銘を受けると同時に、頭の片隅に常に微妙な違和感を抱いていたという。つまりその西洋近代社会科学ではもうひとつ掴みきれない、自分が生まれ、そして育まれた鹿児島の現実、その社会の把握の問題である。多感な青春時代、その圧倒的開明性を米国留学の中で主体化、内面化した加藤氏は、しかし、それでも残る違和感を抱えながら帰国する。そして日本の現実、自分のアイデンティティーの根っこである故郷の現実と意識的に向かいあうことになる。加藤氏の言では彼は「故郷に留学しに帰国した」ということになる。そして彼にとってのその「留学」は数十年を経た今でも続いているという。それはもちろん外国体験をした人間が時として帰国後に経験する「母国への適応の困難」「逆カルチャーショック」などという単に個人的な次元の問題のことでは全くない。大隅半島の、鹿児島の現実や歴史からはまだまだ学ぶものがたくさんあるという意味での、尽きない発見の旅としての「留学」である。加藤氏の帰国後の鹿児島での活躍は目をみはるものがあり、

すぐにその地でのリーダー的存在になり、乞われて衆議員選挙への出馬も経験することになる。生まれ故郷の価値とその解明を常に問題意識として持ちながら、彼の眼は徹底的に鳥瞰図的である。特に沖縄、アジアを見つめる彼の眼は捕らわれないスケールの大きなものである。

いずれにせよ加藤氏との対話は、やはり正統的西洋社会科学が掬いあげきれなかった非西洋社会の現実を、どのように掬いあげるのかということに焦点が当たる。非西洋社会の埒外で歴史を紡ぐことになった社会をも含む、新たな分析の道具を打ち立てることが可能なのかということである。加藤氏は様々な歴史的スポットを案内しながら、また地元の友人たちとの会食に招待してくれながら、その地その地にまつわる歴史的ディテールの話をつづらねて次へへと繰り返す。柳田国男から大隅半島の話の話を聞いているような錯覚に陥る。そういえば冒頭で触れた故神島二郎は、自らの学問的スタンスを「柳田国男と丸山真男」の架橋と克服（柳田からは事実の発掘を、丸山からは問題の組織化を）であると、神島自身が主催し筆者も長年参加していた「比較日本研究会」で述べていたが、まさしく加藤氏もまた歴史的事実の発掘という柳田的視点と丸山的抽象化の視点との両方で、自らの生まれ故郷でのフィールドワークに肩の力を抜きながら注力していた。そこから様々な刺激をいただく鹿児島訪問となった。

本報告はプロジェクト二年目、つまり中間点における報告であるが、この報告書作成時点でも本プロジェクト展開のための新たな要素が生まれつつある。筆者は2019年10月末、「世界連邦日本国会委員会」主催のアトール・カレ国連事務次長との懇談会（衆議員第一議員会館）に有識者枠で出席し発言したが、そのさい猪俣元コスタリカ全権大使及び小溝元クエート全権大使とご一緒した。筆者は以下のような発言を行った。以下に記載しておく。なおこの発言要旨はおそらくそのまま「日本国際平和構築協会」のホームページに掲載されることになるはずである。

石積発言趣旨（於：衆議員第一議員会館第6会議室）

*We find in the second page of our resume, two resolutions adopted in the National Parliament of Japan in 2005 and 2016. (「国連創設及び我が国の終戦・被爆60周年にあたり更なる国際平和の構築への貢献を誓約する決議」(2005年8月2日衆議員)「我が国の国連加盟60周年にあたり更なる国際平和の構築への貢献を誓約する決議」(2016年5月25日参議院))*

*Both of them stipulate crystal clear Japanese firm commitment to the peace building process through the UN. They also declare national commitment to the further evolution of global political integration, i.e. ultimate creation of the World Federation.*

*I sincerely request Japanese Parliamentarians to live with this commitment. I hope Japanese Parliamentarians present today make special effort in dispersing the strong commitment of Japan to the multilateralism at every opportunity. I am of course confident that honorable Under Secretary General Atul Khare who kindly delivered a very encouraging speech today also support this valuable voice of Japan. I would like to reiterate strongly the importance of the fact that Japan which is still a major financial contributor to the UN continues to adhere firmly to the multilateralism and the UN idealism at the time of the rise of nationalism in many parts of the world.*

(石積による和訳)

本日配布されたレジユメの2ページ目には2005年、2016年のそれぞれ衆議院、参議院での決議文が掲載されています。いずれにおいても、日本の、国連を通じての平和構築へのコミットメントが明確に示されています。両決議文はさらに、グローバルの政治統合への展開、すなわち究極的には世界政府/世界連邦の構築への、日本としてのコミットメントが示されています。私としてはこのコミットメントを堅持していただきたいと、議員の皆様には強くお願いしたいと思います。また本日もご出席の議員の皆様には、是非ともあらゆる機会をとらえて、この日本の多国間主義に対するコ

ミットメントを国際場裡でおおいに喧伝していただくべく、お願いしたいと思います。もちろん本日、大変勇気付けられるお話をしてくださった国連事務次長アトゥ・カーレ閣下におかれましては、この日本からの貴重な声を支持していただけるものと確信しております。私としては、世界中で自国中心主義が台頭しているこの時代において、依然として国連への主要な拠出国である日本が、多国間主義や国連の理想主義を堅持し、主張している、その重要性を強調させていただきたいと思います。(以上、石積発言趣旨「日本国際平和構築協会」HPに掲載)

会議の後での懇談の中で、本プロジェクトのヒントになるようなお話を縷々いただいた。特に小溝大使はついこの前まで広島平和文化センターの理事長であったということもあり、その視点からもいろいろご意見をいただき、日本の平和主義の問題を様々な角度から論じるという、まさしく談論風発の、じつに刺激的な場外セッションとなった。結局のところ、この日本の平和主義の問題も本プロジェクトのテーマである「政治学グランドセオリーの新展開」がそのカギを握っていると改めて確認したところである。猪俣、小溝両大使との対話も今後継続し、残されたプロジェクト期間で、一歩でも二歩でも「政治学グランドセオリーの新展開」という本プロジェクトを前に進められたらと考えている。